



春日井ロータリークラブ 2011～2012年度 WEEKLY REPORT

クラブテーマ

仲間を増やし、 思いやりの心を育もう

会長：風岡 保広 例会日：金曜日 12:30～13:30
副会長：清水 勲 例会場：ホテルプラザ勝川
幹事：北 健司 事務局：春日井市鳥居松町 5-45
会報委員長：志水ひろみ TEL:(0568)81-8498 FAX:(0568)82-0265
E-mail : ksgj-rc@gaea.ocn.ne.jp



東京都議会議長賞

東京朝顔研究会

本日のプログラム

- | | | |
|--------------|----------|--------|
| ・点 鐘 | 司会 | 加藤久仁明君 |
| ・国 歌 | | 風岡 保広君 |
| ・ROTARY SONG | 「君が代」 | |
| ・ビジター紹介 | 「日も風も星も」 | |
| ・食事・歓談 | | 風岡 保広君 |
| ・委員会報告 | | |
| ・会長挨拶 | | 風岡 保広君 |
| ・春日井消防署 職員表彰 | | |
| ・卓 話 | 春日井消防長 | 伊藤 敬氏 |
| ・幹事報告 | | 北 健司君 |
| ・点 鐘 | | 風岡 保広君 |

先週の記録

会長挨拶 会長 風岡 保広君

先週の、4月第2例会は、家族会ということで京都の方へ行ってきました。桜はもう遅いかと思っておりましたが、今年は開花がすこし遅れておりちょうど満開というタイミングのよさで、古都の1日を満喫してまいりました。

この4月は、「ロータリーの雑誌月間」に指定されており、クラブはその月間中に雑誌に関するプログラムを実施しなければならない、というふうになっております。

春日井ロータリーもクラブ計画の中で、雑誌・資料委員会として、「ロータリーの友」、「ガバナー月信」等の愛読を勧めるとともに、其のほかRI情報の提供をしながら、会員資質の向上をはかる。となっております。大変目立たない事業ですが、広報委員会と連携して、一般にもクラブのPRをしながら、会員増強につなげていくようにしなければいけないと思います。

今日は、春日井警察署員の皆様の表彰ということ

2012年5月11日(金)第2091回(5月第1例会)

で、警視正であります春日井警察署の折小野(おりこの)署長さんをはじめ署員の皆様においていただきました。特に折小野署長さんには、異動で春日井署においてになったばかりで、大変お忙しいなかロータリーのために卓話をしていただきます。一つよろしく願いいたします。

幹事報告 幹事 北 健司君

第11回理事会開催の案内
日時：5月11日(金) 11:30～
場所：カウンスルルーム
出席予定者：理事・役員

地区役員及び会長幹事懇談会開催の案内
日時：6月9日(日)
式典・懇親会：18:00～20:30
場所：名鉄グランドホテル 11F 柏の間
出席予定者：会長・幹事

第1期RLI分科会研修パート 開催の案内
日時：5月27日(日) 09:00～19:00
場所：名古屋国際ホテル
出席予定者：名畑 豊会長エレクト

例会変更のお知らせ

瀬 戸 R C	5月23日(水) 5月23日(水) 6:00～	早朝移動例会の為 定光寺
尾 張 中 央 R C	5月23日(水) 5月23日(水) 18:30～	夜間例会の為名鉄グランドホテル
一 宮 中 央 R C	5月23日(水) 5月19日(土)	親睦旅行の為 奈良方面

出席奨励月間

例 会 予 定	5月18日(金) 祝福 卓話 小島 啓治君 卓話 高橋 理江君	5月25日(金) ロータリーの森例会 12:30～	6月1日(金) 理事役員会 12:30～ 卓話ホテルプラザ勝川 大鹿 裕司氏	6月8日(金) 祝福 卓話 大橋 完一君 卓話 中川 健君
---------	--	---------------------------------	---	--

ホームページ：<http://www.kasugai-rc.jp>

E-mail：ksgj-rc@gaea.ocn.ne.jp

報などあらゆる情報が存在します。例えば、ある国で日本の商社がレアメタルの生産を手がけ、輸入する商談を行っているとして。この商談を進めるため、現地商社は本社とのやり取りやあるいは国の後押しを受けるために大使館等の力を借りて商談を進めます。これらの商談には、値段や条件的なものなどさまざまな情報が本国との間でやり取りされます。この過程でいち早く情報を入手したエシユロンの組織は、自国の商社に情報を流し、日本の商社より良い条件を示し、その商談を横取りすることが可能となります。実際にあった話で、日本商社や日本大使館の情報が取られ、原子力発電やレアメタルの商談が取られています。

もうひとつ情報関連の例を挙げます。アメリカのCIAの情報収集と活用の方法です。ご存知のようにCIAは、世界を代表する対外情報機関ですが、冷戦時代は主に共産圏諸国に対する軍事や政治関連情報の収集に力を入れていました。しかし、冷戦後、その活動は、経済分野の情報収集にも大きな力がシフトされるようになりました。その中で、彼らが使っている機関員がNOC S(ノックス)といわれる情報機関員です。CIAの情報活動は、大使館員等の公的な身分で勤務するOC S(オフィシャルカバーズ)と一般の会社員や商社員の身分で勤務するNOC S(ノンオフィシャルカバーズ)の機関員によって情報収集がなされます。

このNOC Sの機関員は日本にもたくさんいます。数年前、アメリカで起こったトヨタ社のブレーキ欠陥に伴うリコール運動を覚えていますか。この運動の発端はNOC Sが遺啓していたと言われています。当時、アメリカは基幹産業の自動車業界が軒並み経営不振でビッグスリーと言われる自動車会社も会社更生法の適用を受ける程になっていました。その中でトヨタだけは、世界一の販売量を誇り、米国でも相当の人気がありました。そんな状況で、アメリカは自国の基幹産業が不振にあえいでいることに大きな危機感を持っていました。それを立て直すためにトヨタに焦点が当たった訳です。同盟国といえどもこれが米国流の国益保護です。

この時、NOC Sによって集められた情報は、トヨタの開発プログラムやリコールに関する内部情報だと言われています。これらの情報は集約されて保守的な政治家に流され、米国内で多くの訴訟事案を引き起こし、トヨタはそれに対応せざるを得なくなりました。

結果的にはブレーキの欠陥はなかったとの裁判所の判断が出ましたが、トヨタはこの処理で莫大な費用を使わざるを得ませんでした。この間にアメリカの自動車業界は立ち直りました。

このように、この二つの例は、国家が介入して自国の危機管理のために情報を活用した例です。

では、日本人の危機管理意識についてひとつ例を挙げます。

中央アジアに元ソ連邦を形成していたキルギスという国があります。ここで1999年8月23日にイスラム過激派による日本人人質事件が発生しました。三井鉱山の技師として鉱山開発調査に派遣されていた4人の日本人がイスラムゲリラに拉致されました。当時の情勢は、イスラム過激派勢力が、イランからアフガニスタン、タジキスタン、キルギス、ウズベキスタンを中心とした地域に一大イスラム国家を形成しようとする動きがあった時代でした。タジキスタンでは同時期、外務省に出向して現地調査を行っていた北海道大学の秋野豊教授がイスラムゲリラに殺された時期でもありました。

私は当時、外務省に出向して在モスクワ日本大使館で勤務していました。この事件が発生して直ちに現地に行き、現地対策本部の立ち上げを命じられました。解決まで約2ヶ月かかりましたが、人質は全員無事解放されました。しかし、この時、現地のアメリカ大使館員から日本の危機管理は全くなっていないといわれました。現地の情勢は日々変化しており、危険な状態にあったにもかかわらず、そうした情勢が現地の日本人に全く伝えられておらず、なるべくしてなった事案であると言ったことでした。

この時、アメリカはどうしていたか、彼らはこうした情報を刻々と分析して現地のアメリカ人に伝えていたということでした。

こうした話を聞いてつくづく情けなかったことを覚えています。

皆さんも海外旅行をされるとと思いますが、個人的な日本人の卑近な失敗事例を危機管理意識と捉えて紹介します。

日本人は長い間「水と安全はただ」という意識を持って生活してきました。海外旅行をするこの意識が全く通用しないという例です。

韓国に旅行をしました。喫茶店に入ってコーヒーを注文しました。ウエイトレスが水とコーヒーを持ってきました。いつもの習慣で水を一口含んでコーヒーを飲みました。とたんに激しい腹痛と吐き気に見舞われ、救急車で病院に運ばれ点滴を受ける羽目になりました。夜になってバーに行きました。ウイスキーのロックを注文しました。飲んでいるうちにだんだんおなかの調子が悪くなり、トイレに駆け込み激しい下痢になりました。

これらはいずれも水や氷というものに日本と同じ感覚で接したにほかなりません。

ロシアに旅行しました。町を見学していると誰かが後ろから急いで追い越していきました。そし

て、追い越しざまビニール袋を落としました。お人好しい日本人は「落としましたよ」と声を掛けましたが、相手は聞こえないのかそのまま走り去ってしまいました。仕方ないのでビニール袋を持った日本人は、袋から透けて見える中身がお金であることに気が付きました。警察に届けなければと思い、警察を探そうとしていると通りかかったロシア人が声を掛けてきました。日本人がいきさつを説明するとロシア人は、「そんなものを警察に届けると警察が懐に入れるだけだ。二人で山分けしよう。」と言ってきました。そうこうしている内に先程袋を落とした男が戻ってきて落し物がなかったかを尋ねてきました。心配していた日本人は、拾った袋をさしだしました。ロシア人は礼を言いながら袋を確かめました。そして、お金が足りないと言いつつ、日本人に「お前が盗んだのではないか。」と言いがかりをつけてきました。日本人は「そんなことはない。」と言いましたが、相手は納得しません。相手は、財布の中身まで確かめ、ようやく納得し、所持品を返して去って行きました。やっと安堵した日本人は、所持品をしまう中で財布を確かめると財布のお金が消えていました。先程山分けを働きかけてきたロシア人もいつの間にかいなくなっていました。

イタリアに旅行しました。ローマに行きました。オードリー・ヘプバーンが出演した映画「ローマの休日」をご存知の方もいると思いますが、有名なスペイン広場に行きました。映画と同じように階段をスペイン広場の方に下りて行きました。広場の先は、ローマ屈指のブランド街が続いています。すると、前方から4～5人の子どもがダンボールの切れ端を持ってこちらに走ってきました。何かを叫んでいますが言葉がわからないため見ていると、いきなり近づいてきて、ダンボールの切れ端を顔の前に目隠しするようにして日本人が所持していたバッグやポケットに手を突っ込み、掴んだものをすべて持って走り去りました。何が起こったのか気付くのにしばらくかかりましたが、子どもを使ったひったくりでした。

このように数え上げれば限りはありませんが、日本国内では起こることがないと思っていることが実際起こるのです。被害に遭うのはいつも日本人なのです。

こうした例を見れば、私たち日本人が如何に危機に対応する能力が衰えているかがわかります。

危機管理の要諦は、まず第一に情報です。情報を如何に早く収集して活用できるかにかかっています。

次に危機が発生してからの対応を如何に早く前広く対応できるかで拡大防止を図ることができます。

そのためには、事に当たって事前の知識をどれ

だけ持って、それをかつようできるか、すなわち、いざという時の具体的なマニュアルを持っているかということが重要です。

現在の社会変化はめまぐるしいものがあります。現代社会を生き抜くために変化に耐え得る危機管理を行っていくことが、個人としても企業、団体としても必要なのではないのでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。



(会長挨拶)



(春日井警察署 職員表彰)



(卓話 春日井警察署長 折小野裕之氏)

